



## No. 6 (2005年7月発行) 発行：北海道海洋生物科学研究会

- |                  |                |
|------------------|----------------|
| 1. 私が会員です (第10回) | 沖野 龍文さん(北大院地環) |
| 2. 私が会員です (第11回) | 梶山 雅秀さん(北大院水)  |
| 3. 事務局日より        |                |

### 1. 私が会員です (第10回)

#### 沖野 龍文さん (北海道大学大学院地球環境科学研究院)

本会の事務局担当として、会員の皆様にはお世話になっております。本会の会則第2条には「本会の事務局は、北海道大学大学院地球環境科学研究科内におく」と明記されているのですが、実は上にも書いてあるように所属先の名称が変わりました。研究科が研究院となっただけで1字の違いですが、大きな変化があります。現在北大の大学院では、教員が所属する研究組織である研究院と、学生が所属する教育組織である学院の2本立てに改組しようとしています。その先頭として、本会会員の多い水産と私共の地球環境がこの4月に改組しました。学院はこれまでの構成員に、北方生物圏フィールド科学センターおよび水産科学研究院の一部が加わり、環境科学院という名称となりました。海洋生物研究者が増え心強い限りです。研究と教育の組織を分離することの是非は議論のあるところですが、改組を機会に組織としての活性化を狙うことが目的だと理解しています。特に、所属する新設の環境起学専攻は、環境問題の解決に向けた目的志向型の教育体系を標榜して、侃々諤々の議論をしています。学生には1期生は優秀なことが多いとハッパをかけていますが、これは教員も新しい組織を作る意気込みをもつべきという自戒でもあります。

ところで、私自身のことを振り返りますと本会会員の一宮先生と過ごした高校時代まで札幌で育ちましたが、その後関東での生活が続き、2001年に北大に赴任しました。北大地球環境は講座制に裏打ちされた研究室の歴史というものが存在せず、教員の異動があれば引き継がれるものはほとんどありません。しかし、幸運にも本会代表幹事の鈴木先生と1年半同じ講座で過ごすことができ、物心両面において研究室のスタートを支援していただきました。現在は天然物化学を基盤として、学生時代から手がけている藍藻に加え海藻などにも手を広げ、培養細胞や酵素などを使って生物活性物質の探索を進めています。また、院生の石井君が大量発生しているヒトデについて既に紹介していますが、種苗生産の盛んなウニやナマコの幼生の変態にも取り組んでいます。また、本会会員の伏谷先生が総括責任者であった着生機構プロジェクトでフジツボ幼生の着生阻害物質を探索しておりましたが、北海道でも現場の方からの要望が強いことを知り、付着防除研究も再開しています。このように、地域の方との連携は、関東より北海道では密接に行われていることを感じます。

最後に、学部をもたない大学院がどのように学生を募集できるのか、不安でありましたが、インターネットを通じて研究室を紹介することにより、関心をもってもらえるようになりました。今後は、研究成果も世界へ発信していきたいと思っております。

## 2. 私が会員です (第11回)

帰山 雅秀さん (北海道大学大学院水産科学研究院)

### 「母川回帰しました」

今年の4月に、北海道大学大学院水産科学研究院海洋生物資源科学部門資源保全管理戦略分野に異動しました。何とも長く分かりづらい所属名ですが、ようは北大の水産です。1973年同大を卒業しましたので、32年ぶりに母川回帰したことになります。これまでサケ類の生き様(生活史戦略)、人口動態(個体群生態学)および陸域への物質輸送(生態系保全生態学)について研究を続けてきました。ミイラ取りがミイラになったということでしょうか。

今世紀は、地球生態系保全と生命科学の時代と言われます。人類は人口60億人を超え、この地球上のドミナントとなり、前世紀までの科学技術による大量生産、大量消費、大量廃棄などの社会システムの構築により、地球温暖化やエネルギー問題にみられるように地球上の人類を含むすべての生物の生存に影響を及ぼすまでになってきたことは周知のとおりです。地球に誕生した生命の歴史38億年において、その一瞬にすぎない人類の歴史が地球生態系を変質させたことになります。今世紀の科学では地球生態系を構成する大気、水、土壌、生物などが有限であり、人類が獲得してきた技術に傷つきやすいことを認識し、増加し続ける人口に対処する食糧の確保と安全性、持続循環型地球生態系の保全を中心とする科学論を展開していくことが重要であると考えます。

しかし、われわれをとりまく地球環境は、日本の食糧自給率の低さ、グローバルな水産生産物の伸び悩み、ダイオキシンなど有害物質による食の安全への脅威、経済優先の食糧産業による地球生態系における有機物の物質循環の偏り、工業化・海洋汚染・河川工事・都市化などによる生態系の単純化、それに起因すると考えられる地球温暖化問題などなど、なかなか厳しい現状にあります。

このような現状をふまえ、今後の水産海洋学ではこれまでのような単一個体群あるいは単一種にターゲットを絞った資源管理には限界があり、水圏生態系ひいては陸圏も含めた地球生態系レベルでその構成種の動態を論じていくことが基本的に大切であると思います。とりわけ、水圏科学においては生態系における環境収容力と生物生産、人類と地球生態系との調和、人口増加に対処した人類全体の持続的な食糧の確保と安全性の教育と研究が責務ではないでしょうか。ちょっと大げさな書き方になりましたが、私は以上のような観点から21世紀を担う研究者・技術者を教育養成するとともに、これまでの研究を継続していきたいと考えています。今後ともよろしくお願い致します。

[連絡先]

帰山雅秀

北海道大学大学院水産科学研究院

〒041-8611 函館市港町3-1-1

TEL/FAX: 0138-40-5605

E-mail: salmon@fish.hokudai.ac.jp

### 3. 事務局だより

#### 1) 年会費納入のお願い

平成17年度年会費を同封の払込票で払い込んでください。一般会員1,000円、学生会員500円です。なお、平成16年度会費未納の方には、2年分をお願いします。

口座番号 02700-1-93161 加入者名 北海道海洋生物科学研究会

#### 2) 会員募集

個人の会員はもとより、団体としての入会も歓迎します。ぜひ、賛助会員第1号のなっただけの方にお声をかけてください。(賛助会員年会費 10,000円) なお、入会希望の方には払い込み票をお送りしますので、ご連絡下さい。

#### 3) 住所録の作成

会員間の交流の助けとするため、年1回程度会員の氏名・所属・住所・電話番号などをニュースレターに掲載したいと考えています。住所録の作成についてのご意見をお寄せ下さい。掲載が不都合な方も事務局沖野までご連絡下さい。

#### 4) 今年度シンポジウム・総会・懇親会等について

小林淳一先生(北大院薬)を中心に現在企画検討されています。時期は12月初旬を予定しているそうです。詳細な案内は、次号以降のニュースレターに発表する予定です。

・本会に関する問い合わせ・入会希望は、事務局(沖野 龍文) TEL011-706-4519、電子メール [okino@ees.hokudai.ac.jp](mailto:okino@ees.hokudai.ac.jp)

・ニュースレターへの情報提供・投稿などに関するお問い合わせは、ニュースレター編集担当(栗原 秀幸) TEL0138-40-5561、電子メール [kuri@fish.hokudai.ac.jp](mailto:kuri@fish.hokudai.ac.jp) までお願いします。



#### 編集後記

編集の怠慢により1ヶ月ほど発行が遅れて申し訳ありません。6月頭に根室に海藻のサンプリングに行ってきました。JRで函館～南千歳～釧路～根室という移動で、一泊二日の強行日程で行ってきました。「やっぱり北海道は広い。。。」この広い北海道を体感し、このニュースレターが全道に散らばる皆様をつなぐ一助になればと思いました。(栗)